

# 雲仙・島原史の多文化研究

## —交易と信仰から地域振興の時代へ—

山崎 功 (助言)<sup>1</sup>, 東 加代子<sup>2</sup>, Ta Thi Huyen<sup>2</sup>  
清川 千穂<sup>2</sup>, 田中 佑実<sup>2</sup>

A Multi-cultural Approach to Unzen-Shimabara History:  
Trade, Belief and Regional Development.  
2017 Progress Report for a Women and Young Researchers Project

Isao YAMAZAKI (adviser), Kayoko HIGASHI, Ta Thi Huyen,  
Chiho KIYOKAWA, Yumi TANAKA

### 要 旨

本研究報告では、佐賀・九州の特色ある芸術・工芸・歴史文化の背景にある文化的重層性・多様性を読み解き、佐賀の歴史文化を広く九州・アジア・世界へと繋げる女性・若手研究者の取組成果の一部を紹介する。本中間報告では、研究発信地佐賀との比較視点をふまえて雲仙・島原地域を主対象に、九州の自然と歴史に根差した山岳信仰やキリシタンをめぐる「信仰」の歴史、「南蛮」世界とのつながりで読み解く中近世欧亜「交易」の歴史、さらにこうした歴史文化が近現代に如何に繋がっているかを「観光」・「地域振興」をキーワードに明らかにしようとしている。

### 本研究の背景紹介

本研究報告では、芸術地域デザイン学部の特徴・佐賀の歴史文化を活かした女性・若手研究者自主研究グループ（大学院地域デザイン研究科在籍生ら）による、粗削りながらもさらなる研究深化が期待される意欲的な中間成果の一端が紹介されている。本学教員の助言支援のもと、研究成果をとりまとめつつある。

うちひとつは佐賀の歴史・文化との比較視点を踏まえた「外来文化の受容と変容—時代を超える文化多様性」（研究代表地域デザイン研究科田中佑実、女性・若手教員等の研究事業採択）、ふたつめには佐賀との比較視点を踏まえた「雲仙・島原史の多文化研究—交易と信仰から地域振興の時代へ」（研究代表地域デザイン研究科東加代子（外部助成「島原半島ジオパーク学術研究助成」を受けている）がある。これらの研究企画は佐賀の特色ある芸術・工芸・歴史文化の背景にある文化的重層性・多様性を読み解くことを

<sup>1</sup> 佐賀大学芸術地域デザイン学部 地域デザインコース  
Course of Regional Design, Faculty of Art & Regional Design, Saga University

<sup>2</sup> 佐賀大学大学院地域デザイン研究科修士課程2年  
M.A. Program student, Graduate School of Regional Design, Saga University

めざし、美術史、アジア史、地域研究分野、芸術表現等を専門とする女性・若手研究者が集い、佐賀の歴史文化を広く九州・アジア・世界へと繋げる若手研究者の相互連携の取り組みである。その第一歩として取り組んだのが雲仙・島原史への多文化アプローチである。

雲仙・島原には、島原半島の豊かで特色ある自然環境に由来する土着文化と九州地域間の摩擦と交流、さらにアジア・ヨーロッパ外来文化の融合と相克の歴史が見出されるといわれる。<sup>1</sup>こうした雲仙・島原の歴史文化を読み解くキーワードとして、「信仰」、「交易」、そして近現代につながる「観光」、「地域振興」を挙げることができる。

本研究報告の第一の特色は、先行研究を踏まえつつ雲仙・島原の自然と「信仰」の関わりに改めて着目した点にある。雲仙岳の温泉と硫黄ガスが特徴づける荒涼とした「地獄」イメージが山中他界観と仏教の地獄思想と融合し、独特の山岳信仰と各地の「地獄」を生み出したこと、さらにキリシタン信仰の拡がり  
と既存宗教との対立相克の中で、キリシタン殉教と雲仙地獄のイメージが意図的に結び付けられ、日本、ヨーロッパ双方でそれぞれ多様に言説化されたことなどの再検証を試みている (本稿1、2章参照)<sup>2</sup>。

雲仙・島原の特色として注目すべきは、島原半島を中世から近世にいたる「南蛮」世界や東シナ海「倭寇」とのつながりで読み解くことで見えてくる可能性である。近年、戦国期「交易」をめぐる九州の世界史的  
位置づけに注目が集まっている。戦国期ポルトガルの来航に代表される中近世島原半島口之津の歴史的重要性は、大村氏、有馬氏らキリシタン大名の盛衰、キリスト教禁教とともにアジア海域世界とのつながりのなかでひきつづき考察しなければならない点であると思われる。<sup>3</sup>また近代以降、遠浅で潮の干満の大きな有明海への入口・外航船の窓口として、三池炭の浮船積み換え港として大いに繁栄した。<sup>4</sup>三池港整備後も多くの船員を輩出、現在も国立口之津海技学校が多くの海の男を育てている。近代口之津の歩みの考察も、本研究の今後の課題である。<sup>5</sup>

本報告3章では、こうした「信仰」と「交易」で特色づけられた雲仙・島原の歴史文化というものが、キリスト教禁教が解かれた近現代以降に如何に繋がっているかを「観光」・「地域振興」をキーワードに読み解こうと試みている。明治以降、近代日本と世界を結ぶ重要な外洋航路として長崎=上海航路が整備されたことは知られている。特に上海、香港、南方(東南アジア)方面、北はロシアのウラジオストックや中国ハルビンなどから多くの外国人が長崎を訪れる。ここで興味深いのは、長崎港を訪れる外国人の避暑・避寒保養地需要と、近世以降宣教師の間で変容継承された雲仙地獄の「殉教」言説が、明治期潜伏キリシタン発見の衝撃とともにひとつの雲仙観光ブームとして結びついた点を明らかにしようと試みている (本報告第3章)<sup>6</sup>。

今後の本研究企画の研究射程としては、戦前期日本の「国際観光立国」の象徴としての雲仙温泉のありようと、戦後への連続性の実証解明が課題として挙げられると思われる。「殉教の聖地」イメージを背景に、外国人向けのハイカラな保養地として出発した雲仙・島原は大正・昭和期に入り、戦前期日本の「観光立国」を目指す国際観光リゾートとして整備が進められる。雲仙・島原をはじめとした全国の景勝地の国際公園計画は、鉄道省国際観光局主導での官民一体の国際観光ホテル建設とともに戦前期日本の「国際化」を象徴するものとなった。1940年東京オリンピック招致とあわせて雲仙の国際リゾートブランド発展がさらに推し進められたといわれる。<sup>7</sup>戦前期雲仙・島原の隆盛と戦後の問題は、また雲仙と並ぶ九州有数の温泉観光地別府、宮崎の近代における変遷とともに、現在の「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」申請、2020年東京オリンピックを控え、さらなる考察が求められていると思われる。

(助言・山崎 功)

## 序

長崎県南東部に突き出る島原半島は、大噴火、地熱地帯の温泉、島全体の南への移動と沈没によって、地球規模の変動を明瞭に示す地理的特徴を持っている。その地理的特徴にも劣らず、この地で人々が繰り広げてきたドラマの中には、地域史の枠に留まらず日本の行く末をも左右する歴史的事件の数々があった。本研究は、島原半島において人々がどのような信仰形態を展開していったかに着目する。その信仰は自然だけでなく海外交易と深い関係にあった。雲仙の急峻で過酷な自然は古くから山岳信仰を生み、16世紀には口之津での海外交易がキリスト教の受容と発展を支えた。後にキリシタン迫害が始まると、同地は迫害と殉教の場となりカトリック教会にとって聖地とみなされた。20世紀になるとリゾート地として国際親善の場へと変容していくが、その際にクローズアップされたのは避暑地としての要件を備える多彩な自然環境であった。現代では地域振興の対象としてかつての信仰文化に再度注目が集まってきている。先行研究において文化史的視点から奈良時代から現代までの歴史について網羅的に言及したものは少ない。本研究は、信仰と海外交易、そして観光の観点から雲仙・島原という地域を文化史的に考察するものである。

研究方法は、島原半島の郷土史、キリシタン史等の関連書籍や文献資料を用いて関連事実の把握を行い、さらに雲仙・口之津・天草を中心とするフィールドワークを通して、地域住民からの聞き取り調査や現地において記録され、継承されている歴史の確認を行う。

本稿は大きく三つの柱からなっている。第一章では雲仙が古くから信仰の場として栄えた背景について、第二章では日本人キリシタンをめぐるキリスト教受容と迫害の歴史について整理し、日本人キリシタンが抱いていた殉教思想について述べる。第三章では江戸時代末期から現代において、殉教地あるいはリゾート地として変容する雲仙の姿を追っていく。

(東加代子、Ta Thi Huyen、清川千穂、田中佑実)

## 1. 修験道と雲仙

雲仙岳を囲む島原半島はその湯のけむる大地と雄大な自然から、山岳信仰を基盤に神仏習合の修験道を中心とする信仰の場として栄えていた。古くから大樹や巨岩、湧き水、湖沼、洞窟、温泉、滝、川などを拝んでいた人々にとって、雲仙岳を中心とする一帯はその豊かな自然から、聖なる地であったに違いない。日本人はもとより、「山川草木すべてものいう」世界であり、あらゆるものがいのちや靈魂を持つという認識があった。<sup>8</sup>この観念は一般的にアニミズムと呼ばれるものである。これらの認識が山の信仰に結びつき、仏教の影響も受けて修験道がうまれた。修験者は山での修行によって自然の特別な霊力、「験」を身に着け、里に下って加持祈祷や病氣治療などを行っていた。修験者は山伏や法印と呼ばれるが、半僧半俗の在家者が主体で民衆の生活の中に深く入り込んでいたという。<sup>9</sup>修験道の拠点として雲仙岳は奈良時代頃から栄えていた。その背景を紹介することとする。

『温泉山縁起書』によると701年、行基菩薩が仏法紹隆の大願を起し、堂塔伽藍を建立したい旨を文武天皇に申し出たところ、免田の寄付をしてもらい、山号を温泉山、寺号を満明寺としたとされている。<sup>10</sup>また行基は四面大菩薩（現在の温泉神社）を勧請して温泉山の鎮護としたという言い伝えが寺院開基だと言われている。<sup>11</sup>つまり奈良時代から温泉山、雲仙岳は霊山として人々の信仰を集めていた。これは同じく霊山、霊場として知られている高野山や比叡山よりも百年ほど早い出来事であったとされる。満明寺と温泉神社の四面宮を拠点に島原半島には多くの末寺や分院ができ、特に温泉山は温泉の湧き出る「地獄」や修行の場として、真言密教の修験道が栄え、多くの僧坊が訪れたと言われている。ポルトガルのイエズス会

宣教師のルイス・フロイスは著書『日本史』で「この硫黄泉に近く、かの山の上には大いなる僧院があるが、そこには実に大勢の仏僧がおり、肥前国全体で、はなはだ多額の収入を有している。ここは日本における最大、かつもっとも一般的な霊場の一つで、不断に巡礼が訪れている」<sup>12</sup>という記述を残している。

修験道を中心に繁栄した温泉山には霊山として、規則が敷かれていた。温泉山は他の霊山、霊場と同じく女人禁制であった。温泉山の女人禁制に関する物語は幾つか残っている。「七日廻りの石」<sup>13</sup>の話は女人禁制であった温泉山にまつわる母と子の悲しい姿を物語るものの一つである。仏教の女性軽蔑観や戒律遵守、神道の清浄観などが結びついて、月経や出産を血穢とみなし、里と山の境界に女人結界を設定した。また山は醜い女性として考えられていたため、山の嫉妬をかわないためにも女性を近づけなかったことが考えられる。現に修行者は山を胎内や子宮と考え、山入の期間は自らを胎内にいる赤子と観念していた。<sup>14</sup>一方女性たちは少しでもその霊験にあやかろうと、女人結界の傍の女人堂や母公堂、姥堂と呼ばれていたところでお経を唱え、代参を行っていた。女人堂には山の神の醜い姥神がまつられており、地獄の入り口の奪衣婆と同一視されていたという。<sup>15</sup>また同時に姥神は安産の神であり、生と死、あの世とこの世の境界にたつ女神であった。<sup>16</sup>温泉山の女人堂は当時四か所存在していた参詣路の中でも最も早く開けた千々石路にあり、婦人の参詣者が群れをなし、昼夜読経の声が絶えなかったといわれている。<sup>17</sup>女人禁制の規則は厳しく、現在「片足鳥居」がある場所は温泉神社の第一鳥居があった場所で、温泉山の女人禁制の高札が立っていたところであった。<sup>18</sup>

また温泉山は巡礼地や修行地として満明寺の衆徒たちによって管理されていた。温泉山に登るときには満明寺が発行する手形、上り切手が必要で、帰りには一乗院から帰り切手が発行された。<sup>19</sup>また根井浄『修験道とキリシタン』の記述から温泉山の登山が「地獄」を用い、いかにシステム化されていたかがわかる。

雲仙の地獄を管理していたのは満明寺の衆徒であり、登山する人を案内し、仏の道を説いたと思われる。法華経の滅罪の功德を説くとともに、亡霊供養としての法華経供養が一乗院で行われていた。雲仙の地獄地帯は、実際の地獄を唱導するには格好の場所であり、雲仙の地獄が広く知られるようになったのは温泉山修験の活動によるものであった。案内や唱導をすることで雲仙地獄への信仰は深められた。<sup>20</sup>

以上のことから温泉山が修験道の活動によって広く知られており、登山者も満明寺の衆徒によってある程度組織化されていたことがわかる。修験道の拠点や山岳信仰の中心地は権力者の寄進によるだけでなく、信者の組織化も推進したとされ、登拝講の生成や民衆の経済的上昇に支持されて発展してきた。<sup>21</sup>また山麓には参詣する道者の便宜を図る御師(宿泊施設等)の集落を形成して、信仰と娯楽を組み合わせたといい。<sup>22</sup>温泉山は温泉が出るだけに、修験者のための設備も十分に整えられていたであろうことが伺える。

## 2. 日本人キリシタンと殉教思想

### キリスト教の受容と迫害

前述の通り島原半島は雲仙を中心に日本古来の信仰を具現化した霊場を有していたが、一方世界に開かれた港も有していたことで異文化との接触が可能な土地柄でもあった。本章では16世紀、ポルトガルからの貿易に付随して流入したキリスト教がいかに受容され、後に迫害されたかを考察するが、その前に島原半島が西洋文化と接触することになった経緯を確認したい。

ポルトガル人ヴァスコ・ダ・ガマが1498年にインドへの航路を発見して以来、ヨーロッパ人によるアジ

ア進出が始まった。<sup>23</sup>ポルトガルは1513年に中国に接触、さらに1517年、1521年と使節を派遣するが、中国はポルトガルを朝貢国とは認めず両国の正式な交易にはいたらなかった。しかし当時、明朝政府による海禁政策は緩んでおり、民間商人による密貿易によって東西の交易は盛んであった。それはいわゆる後期倭寇が跳梁し始めた時期にあたる。彼らは1520年代に浙江省寧波の双嶼島を交易の拠点にすると、ポルトガル人を誘い込み密貿易を行うようになった。やがて中国人、日本人、ポルトガル人が入り交じっての密貿易が展開した。こうした動きのなかで、1543年、倭寇王直の船に便乗したポルトガル人3人が種子島に漂着する。1548年、倭寇王直は明の圧迫を受けて双嶼島を追われ、平戸を基地とするようになる。<sup>24</sup>1550年、ポルトガル船が王直に導かれて始めて平戸に入り、その後毎年九州各地に入港するようになったことで、南蛮交易が開始するのである。日本人にとってポルトガル商船がもたらす商品で最も重要だったのは、中国産の生糸であった。生糸は当時日本ではほとんど生産されていなかったため、その上質のものは白糸と呼ばれ珍重された。その対価として日本から持ち出されたのは日本銀であった。<sup>25</sup>これはいつの時代にも言えることだが、国家が主導する外交交渉に先んじて、商人達は逞しくも利益を求めて独自の交易ルートを切り開いていったのである。

ポルトガルは当時、アジア地域へ植民地および貿易相手国を求め進出していたが、同時にキリスト教の布教もカトリック教会と手を携えて推進する国家事業であった。1549年、国家の後ろ盾を得たイエズス会宣教師フランシスコ・ザビエル<sup>26</sup>が鹿児島に上陸する。西洋発の大航海時代の波が日本に到達した歴史的な瞬間である。<sup>27</sup>当然のことながら、この海外交易の流れは「天然の良港」と呼ばれる口之津にもおよんだ。1562年、有馬義貞が同地を日野江城の外港とすると、続々と西洋文物とキリスト教が入ってきた。「有明海の入り口」を示す名の通り、口之津はやがて海上交易の重要な港へと発展したのである。

当時の日本は大名が覇権を争う戦国時代である。富国強兵を願う大名たちはこぞって武器弾薬など貿易船が船載する斬新な文物に惹かれ、ポルトガル船の入港を歓迎した。その際、通訳を兼ねる宣教師を重用し、軍需品の口利きとひきかえに領内での布教活動を許可した。戦国大名で最初に受洗したのは肥前領主大村純忠である。純忠は貿易の安全確保を理由に長崎をイエズス会に教会領として寄進し、神社仏閣を破壊し教会に転用するなどして貿易と布教の拠点を作った。このように我が国のキリスト教との出会いは、貿易に付随したものであった。貿易の現世的利益とキリスト教受容は密接な関係にあり、動機はともかく戦国末期には洗礼を受けるキリシタン大名が多く誕生した。1600年代初期になると西日本を中心に総人口の3%<sup>28</sup>がキリスト教に改宗したとされる。またフロイスの「日本史」には、イエズス会宣教師アルメイダが口之津に来て布教を開始した際、仏寺を教会として活用して高所に十字架を建てたとあることから推察して、おそらくこの頃までに雲仙の霊場もキリシタン勢によって破壊されたと考えてよい。

戦国時代には大名からの寛容な態度を取り付けたカトリック教会であったが、ひとたび天下統一が成ってしまえば権力者から疑心の目を向けられた。徳川政権下では、下層階級者が現世の希望を精神世界に転位すべくキリスト教に改宗した。しかしその強い信仰心と信徒間の結束は、権力者には自身の権威を脅かすものに映ったためキリシタン信仰は弾圧の対象になり続けた。1614年に大禁教令が出されると、口之津や有馬でも大規模な迫害が起き少なからず殉教者がでた。ドミニコ会士宣教師フライ・ヤシント・オルファネールの記述を参考にその概略を以下に記したい。

直純が日向に転封され有馬が幕府の直轄領となると、長崎奉行は幕府からの特許上を盾に長崎の全教会を破壊し、キリシタン迫害を展開した。武器で武装した手勢はあらゆる家を急襲し、悪魔のごとく振る舞いで棄教を迫った。悪辣な言葉と暴力により多くの者は転んだが、中にはあらゆる屈辱に耐える意志の堅い信徒がいた。奉行はキリシタンが尊重する殉教の名声を獲得させまいと、死なない程度

の拷問を加えた。一向に棄教する気配がない事を悟ると、手足の指を切り、さらに膝下を切断した。殺害まではしないはずであったが、出血や拷問による極度の苦悶で死亡する者や、拷問の末に結局斬首された者もいた。

1623年に秀忠の後を継いだ家光の治下では、キリシタンに対して一層厳しい迫害がなされた。とりわけ寛永年間の迫害は残酷を極め、拷問場所のひとつに雲仙温泉が使われた。長崎、有馬で捕縛されたキリシタンは雲仙地獄に送り込まれ、熱湯による拷問を受け棄教を強要された。峻しい山中で硫黄臭を漂わせ、朦々と立ちこめる湯煙、湯が沸騰する不気味な音など雲仙温泉の自然環境はそれだけで人々を震撼させるのに十分であったろう。モンタヌス<sup>29</sup>の日本誌には著名な雲仙地獄図が掲載されている。モンタヌス自身は一度も来日しておらず、その記述は誇張や想像が多い点が指摘されている。しかしその図像は、西洋人が日本の権力者による迫害の様子を想像の及ぶ限り再現した事を窺わせる。以下はモンタヌスの記述<sup>30</sup>に沿った迫害の様子である。

温泉の水面には板を渡して小屋が建てられており、キリシタンはそこに閉じ込められる。一人ごとに番兵が付き、温泉から立ちのぼる硫黄臭で窒息し気を失うと次のキリシタンが入られる。他方では柄杓に熱湯を汲んでは裸体のキリシタンに注ぐ。腐食性を帯びた温泉水は、長期にわたり注がれると皮膚はただれついには骨を浸食する。堪え難き苦痛のために呼吸が切迫してくると医者が救命処置を施し、一層の苦しみを与えるために延命する。女性への拷問はさらに陰惨さが加わった。地獄の湯を注ぐ他、街頭で裸にして四つ足で這わせ、公衆の凌辱するに任せた。あるいはその父親を火刑に処す際、薪材に点火するよう娘に強要した。

これらの非道な行いは、信徒の処刑ではなく棄教を目的になされた。またその残忍さを以て人々の注目を集め、周辺地域のキリシタンに対する見せしめでもあった。拷問を受けて家に帰された人の無惨な姿は人々を戦慄させたであろう。雲仙地獄での拷問によってキリシタンの多くが棄教したとされる。外国人宣教師の首には懸賞金がかけられ、信徒らとともに国外に追放されたり、殺害されたりした。このような徹底的な迫害の結果、二世紀以上の長きにわたり信徒は指導者を失いカトリック教会との接触を断たれた。密かに信仰を続ける者は潜伏キリシタンとなり、表向き日本のキリシタン信仰は完全に消滅した。



モンタヌス『日本誌』

### 日本人の殉教思想

どの地域でも凄まじい迫害に遭い、一時的にせよ棄教せざるを得なかった者や、他国へ逃亡した者が圧倒的に多かった。しかし中には強い信仰心を貫き、喜んで殉教する者がいたのも事実である。前述した口之津・有馬の凄まじい迫害に対して、肉体の苦痛に負けず殉教に臨む信徒にオルファネール自身驚いている。手足の指を切られた時に苦痛を感じたか、という問いに高麗出身の貧しい農民であったミゲルは「軽

く触られる程の痛みだった」と断言したという。このような熱烈な信仰心はどのように育成されたのだろうか。次にこの日本人信徒の殉教思想について考察したい。

そもそもキリスト教における殉教とは、「無抵抗の状況での信仰に基づいた受難死」を意味する。そしてその死は、信仰の証人として命を捧げた神への限りない愛の証であり永遠の命の獲得を意味する。その原点は当然ながら死によって神への証を立てたイエスの受難である。さらに古代ローマ時代には為政者の断続的な迫害によって、多くの殉教者が出た。このようにキリスト教の本質は殉教という歴史的事実と不可分であり、殉教者への崇敬は長い歴史の中で堅固なものになり信仰生活の軸になった。やがて個人的で内面的信仰を復活させようとする信心業が高まり、受難の模倣や追体験願望が生まれた。こうした修道的霊性の傾向は、その白眉である『イミタチオ・クリスティ<sup>31</sup>』に集約され、広汎な読者を獲得した。この書は世俗的思考から離脱しキリストとの霊的一致、内的交わりを教導する。人は厳しい自己反省から出発し、清貧と謙遜を心がけ世俗や自我と戦うことによって内側からイエスと交わることができると説いた。16世紀のヨーロッパは伝統的聖人・殉教者崇拜に加え、必ずしも現実の迫害を前提としないキリストの受難や殉教の内面的追体験への願望があったのである。

16世紀、宣教師はこのような思想潮流の中で海外布教に赴いた。幼少期からキリスト教世界に育ち相應の教育を受けた彼らは、布教先での殉教は覚悟の上であったろう。しかし彼らから教えを受けた日本人信徒は殉教をどのように捉えただろうか。当時の日本人信徒が読んだキリシタン本を取り上げて考察したい。

イエズス会はザビエル来日以降、日本の識字率の高さを知って布教や子弟教育には出版活動が有効と考えた。1590年、天正遣欧使節の帰国にあわせ金属活版印刷機が口之津に陸揚げされると、翌年から『どちりなきりしたん』をはじめ多くのキリシタン本が出版された。17世紀までには現存するだけでも30種類ほどが出版された。ここではその中でも著名な3冊を考察する。

#### (1) 『どちりなきりしたん』

最古のキリシタン本とされるが、キリスト教に関する基本的な教理や祈りについて問答体で簡潔にまとめられた書である。「キリスト教の教義」を意味するポルトガル語「ドクトリナ・クリスタン」に由来。

#### (2) 『サントスの御作業内抜書』(加津佐1591年印刷)

『どちりなきりしたん』に並ぶ最古のキリシタン本で、ローマ字表記の日本語で記された。十二使徒をはじめとする30篇ほどの聖人伝が修められている。具体的な聖人伝を例に殉教の精神や生命を捧げることの意味を述べ信仰生活の指針とした書。

#### (3) 『ヒイデスの導師』(天草1592年印刷)

ルイス・デ・グラナダの著書『信仰の導き』の一部をローマ字表記の日本語で印刷したもの。

『どちりなきりしたん』はザビエルが来日前から準備したキリスト教の入門書で、超越的絶対神などのキリスト教の教理を説いたが、日本人には馴染みの薄い概念であった。そこで後の2冊では、風土や伝統の異なる日本人にも感情移入しやすい聖なる人々の物語が紹介された。いずれもドミニコ会士ルイス・デ・グラナダ(1504-1588 ス페인生まれ)の大著『使徒信条概説』をベースに、イエズス会士ペドロ・ラモンらの手によって日本語に抄訳されたものである。<sup>32</sup>この原著は1582年サマランカで出版されるとヨーロッパでベストセラーになったが、遅れること僅か10年ほどで日本人信徒が読んだことになる。日本人信徒はこの書物の聖人伝を通して、殉教の崇高さと自己犠牲の精神を学ぶこととなった。

佐藤吉昭は、「宣教師は当時西洋で流行した受難追体験としての殉教神学を集団的実践指針として導入した。そこで日本人信徒はキリストの受難を模倣し、実践において原始キリスト教殉教者の道をたどることが望まれた」と述べている。<sup>33</sup>つまり16世紀の西洋において自己克己の心戦、覚悟として説かれたことが、

日本においては事実上の殉教勧告となり原始キリスト教殉教の継承とその再現を準備したことになる。日本は、西洋が長い時間をかけて形成してきた殉教思想や、教会組織の確立過程を辿ることなく16世紀当時のカトリック思想を受容した。西洋にはキリスト教の摂理をめぐって、聖と俗・理想と現実のはざまに生じる相克の歴史がある。複数の宗派を内包するキリスト教界の矛盾や疑問に対しては、各時代に繰り出してきた現実的な視点があった。しかし日本にそうした歴史はなく、あったのはただ素朴な信仰心と不当な迫害であったから、日本人信徒は殉教をより直裁かつ純粹に受け止めたと思われる。

また日本人信徒が殉教に揺るぎない精神を持続させた理由として、共同生活によって培われた強い連帯意識が働いたのではないだろうか。16世紀後半の日本は相次ぐ戦乱によって、病や貧苦に喘ぐ者が大勢いた。アビラ・ヒロンは『日本王国記』で、日本中の貧困と犯罪、奴隷売買など、利己主義の横行と隣人愛の欠如を記している。そうした社会問題に唯一救済の手を差し伸べたのがキリスト教発祥のミゼルコルディアである。この愛徳の組織が日本で誕生したのは、上述のきりしたん本の刊行などよりもずっと古い1554年である。そこでは孤児の保護、ハンセン病患者など差別的扱いを受けた弱者や娼婦の救済がなされた。こうした社会福祉事業は当時の日本社会に全く欠如したものであったから、下層階級を中心に信徒グループが拡大したのである。1593年以降、イエズス会が表立っての布教活動を控えてからは、フランシスコ会による共同福祉事業がより一層充実した。会員は自分の霊性の向上に励みながら、隣人へ精神的、肉体的、経済的な支援をした。

日本人信徒の殉教思想の形成には、確かにキリシタン本による殉教教育が大きな役割を果たした。キリスト教の布教が無ければ、殉教によって永遠の命が獲得できるという概念は導入されなかったはずであるから、人生の現状を打破する最終手段には成り得なかつたであろう。しかし実際にそれが実行された背景には、権力者による残虐非道な迫害はもとより、精神的支柱を希求する下層階級の存在があった。つまり彼らの置かれていた状況が永遠の命を求め、殉教への道を歩ませることにつながったと考えられる。

### 3. 禁教解除と近代化

#### 殉教地からリゾート地へ

二世紀にも及ぶ禁制と鎖国のため、日本は西洋にとって長い間神秘のベールに包まれた国であった。しかしかつて大勢の信徒を獲得し、さらに殉教者をだした日本をカトリック教会が忘れる事はなかった。事態が動いたのは1853年のペリー来航である。欧米諸国の強大さと、隣国中国でのイギリスの横暴に肝を冷やした日本は、翌年に日米和親条約を結び開国を余儀なくされた。さらに1858年に結ばれた5カ国（アメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランス）との修好通商条約では、居留地の外国人に限り教会堂建設を含む信仰の自由を認めた。この期にカトリック、プロテスタント、ロシア正教の宣教師が続々と来日した。開国したとはいえ日本人のキリスト教信仰は禁じられていたから、表向きは居留地内の活動ではあったが、誰しもその本心は日本人への布教であった。

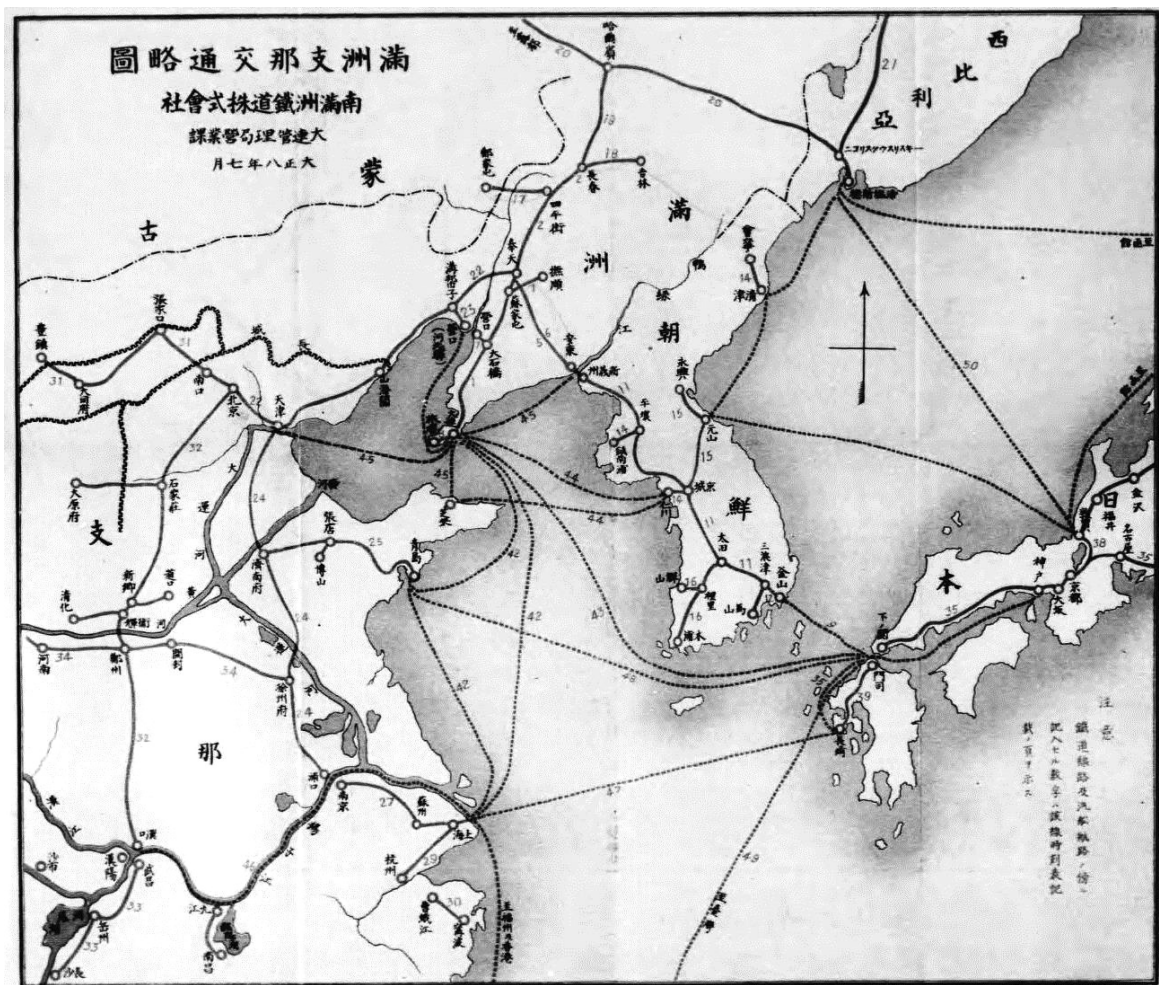
1863年、横浜から長崎に移ったパリ外国宣教会宣教師フューレは布教聖省に宛てた報告書の中で<sup>34</sup>、「凄まじい迫害が続くキリスト教に対する偏見がとりわけ根深い長崎では、信徒獲得を期待できそうにない」と記述している。「むしろ日本国内で内乱か外国との戦争でも起きない限り、日本人がキリスト教に改宗することは難しい」とも述べており、聖地長崎への期待に反して住民から向けられる強い警戒心に失望したことが窺える。しかし潜伏していた信徒がパリ外国宣教会宣教師プティジャン<sup>35</sup>によって発見されるといふ歴史的な瞬間が訪れた。1865年、大浦で26人の殉教者に捧げる天主堂の献堂式が挙行された。ひと月も経たぬうち、教会に入ってきた一人の女性が仲間数人と共に信仰を告白したのである。<sup>36</sup>禁教令と宣教師



不在の状況が250年も続いたにもかかわらず信仰が継承されていた事実は、キリスト教界に大いなる感動をもたらした。プティジャンは感動と興奮を抑えきれず、待望の信徒発見の一部始終を日本教区長ジラルとパリ神学校教師に宛てて事細かに報告をしている。

プティジャンは、長崎に着いて間もなく殉教地の調査に取りかかっている。彼はそれまで不明だった二十六聖人の殉教地をパジェスの『日本二十六殉教記』の記述と現地人への聞き取りをもとに、当時首塚と呼ばれていた立山を処刑の舞台と特定した。<sup>37</sup>さらに多くの殉教者をだした雲仙についても後に調査する予定であることを書き記している。プティジャンに限らず当時の宣教師が日本を思う時、日本人キリシタンの殉教こそがカトリック教会の布教活動を象徴するものであり、立山とともに雲仙も聖地として認識されたのだろう。このプティジャンの記述から、ヨーロッパに雲仙・島原の名がある程度広がっていたことは確かである。

迫害時、雲仙温泉に送られる事は「山入り<sup>38</sup>」と呼ばれた。長崎から茂木にでて船で海を渡り小浜に上陸して雲仙に上ったとされている。途中には山入りの信者が片方の耳を削ぎ落とされたことから、「耳採」という地名も残っている。20世紀、この同じ道を辿って在日外国人や宣教師が雲仙岳をめざした。その目的は避暑や登山、自然にふれあう事であった。避暑地としての雲仙の名が世界に知れ渡った契機は1890年（明治23年）の「ノースチャイナデイリーニュース」に掲載された雲仙の紹介であった。<sup>39</sup>ノースチャイナデイリーニュースは英語表記で上海にて出版されており、当時最も影響力のある新聞であった。これによって中国の上海、香港、南方方面、また北はロシアのウラジオストックや中国ハルビンから多くの外国人観



ウラジオストック、長崎、上海を中心に海上航路や海底電信ケーブルが整備されていった  
 (南満洲鉄道株式会社大連管理局営業課 編『滿洲支那交通便覧』1919年)

光客が訪れた。この時代、長崎と上海の間には明治期から定期航路が設置され、日本と中国、そして世界を結ぶ重要なルートが設立されていた。<sup>40</sup>またデンマークの電気通信事業を営んでいた大北電信会社によりこれらの都市は海底ケーブルでも繋がっていた。1872年にはウラジオストック-長崎間、長崎-上海間を開通し、これに1871年に開通させた上海-香港間の海底ケーブルを繋いだ。このようにロシア、中国、日本の主要都市は様々な経路で繋がっていたため、情報も多く行き交い、長崎の雲仙についても広く知れ渡った。加えて1923年(大正12年)、日本郵船株式会社が設立した上海航路によって物資や人の往来が飛躍的に増加し、たちまち雲仙は日本初の外国人保養地として世界に認識されるようになった。<sup>41</sup>

これらの経路の発達により雲仙は外国人の避暑地として栄え、近代化が一気に進み、外国人向けの洋式ホテルの設立に加え、昭和初期にはゴルフ場やテニスコートが開設された。外国人観光客たちは弓道や乗馬を楽しみ、夜はホテルでのダンスパーティーに興じた。また、雲仙は1934年(昭和9年)に日本最初の国立公園として認定され、それを記念して長崎と雲仙を会場に国際産業観光博覧会が開催された。60日間で約63万人が来場し、避暑地、そしてリゾート地としての雲仙の名が世界に広まっていった。このようにカトリック教会の神父や信者にとっては、殉教地としての雲仙が認識されていたが、一般の観光客には避暑地としての雲仙が認知され、世界的にも避暑地として名を広げていったのである。

### 信仰文化と観光

しかし20世紀後半からは避暑地としての雲仙に加えて殉教地としての雲仙が急速にクローズアップされることとなる。本論ではその要因となる3つの動きに着目したい。それはカトリック長崎大司教区の動きに加え、遠藤周作による『沈黙』の出版(1966年新潮社)、映画化(1971年篠田正浩監督・2016年マーティン・スコテッシ監督)、加えて近年の長崎のユネスコ世界遺産登録へ向けた動きが関係している。ここではそれぞれの大きな説明だけを行うこととする。

殉教地としての雲仙が一般大衆に知れ渡る契機のひとつはカトリック長崎大司教区の雲仙地獄におけるキリシタン殉教記念碑の設置だと言える。現在雲仙地獄を間近で見ることができる場所は観光客が最も足を運ぶスポットである。このエリアの頂上にカトリック長崎大司教区が設置した記念碑が二つあるが、そのうちのひとつは1961年11月5日の日付で雲仙地獄にて受難した殉教者(1867年7月7日ローマで列福)の名簿と碑文が記してある。<sup>42</sup>



雲仙温泉地獄2017年9月清川撮影

それに隣接して立っているのがキリスト教のシンボルである十字架と2008年11月24日長崎で列福された人々の名簿である。こちらの記念碑は2011年5月17日に建立された。それらの横に徳富蘇峰<sup>43</sup>の「聖火燃ゆ」の書が記してあり、毎年5月の第三日曜日には、雲仙地獄で殉教された方々の遺徳を偲び、長崎大司教区主催により雲仙殉教祭が開催され、巡礼が行われている。<sup>44</sup>以上がカトリック長崎大司教区の雲仙地獄に関する主な活動である。雲仙に来た人なら誰もが訪れる場所に石碑を建て、十字架を掲げたことは雲仙地獄が殉教地であることを訴えかけている。



左上1961年  
右上2011年  
下（建立年不明）

キリシタン殉教記念碑  
十字架と列福者名簿  
聖火燃ゆ之碑

2017年9月田中撮影

次に1966年遠藤周作によって書き下ろされた『沈黙』について述べる。『沈黙』は近年の映画化により注目を浴びている作品だが、本論文は『沈黙』を書いた遠藤周作や映画化した監督たちの意図よりも、この作品がどのような反応を人々に与えたかに焦点をあてる。『沈黙』は新潮社から出版され、谷崎潤一郎賞を受賞した程の注目作であったが、出版当初はカトリック教会による批判が多く寄せられた。遠藤周作の映画に込めたメッセージ性はどうであれ、長崎へ布教に来たロドリゴが最後に踏絵を踏むという結末がカトリック教会にとっては良く思われないものであったためである。その影響もあり、小説の舞台である

と同時に多くのカトリック信者を抱える長崎において、『沈黙』は禁書に等しいものであった。<sup>45</sup>1971年には篠田正浩監督のもと、映画『沈黙 SILENCE』が作製され、1972年開催のカヌ映画祭のオフィシャルセレクションに選ばれた。それほどこの作品は良くも悪くも人々の印象に残る物であったことは間違いのない。

それから約半世紀を迎えようとしている今、アメリカの映画監督マーティン・スコセッシ監督により『沈黙』は再度映画化された。2016年12月にアメリカで上映されたのち、日本に上陸した。映画『沈黙-サイレンス-』はアカデミー賞最有力の歴史的大作とも謳われたほど、大きな反響を呼んだことは記憶に新しい。1966年の遠藤周作による小説の出版時の反応とは打って変わり、今回2017年1月21日、長崎での上演開始時には映画館は多くの客で溢れた。それに伴って「長崎観光ポータルサイト ながさき旅ネット」のホームページのリンク先には原作『沈黙』のゆかりの地として、映画の宣伝と共に作品に関するエリアを長崎市内、南島原、雲仙、大村、外海、平戸、五島に分けて紹介している。この中で映画でも取り上げられた雲仙地獄は殉教の地として紹介され、島原の乱の舞台である原城跡を中心とするモデルコースも組んである。また雲仙温泉観光協会のホームページでも「沈黙の舞台を訪ねて」と題し、雲仙地獄殉教地や雲仙キリシタン殉教道、雲仙カトリック教会、耳採を紹介し、「雲仙温泉巡礼お散歩マップ」を組んでいる。このように、2016年の映画『沈黙-サイレンス-』を通して長崎や雲仙は殉教地として地域をアピールすることで注目を集めている。

この流れに拍車をかけるのがユネスコ世界遺産登録へ向けた動きである。このプロジェクトは2007年から進められているが、ようやく2016年「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」として国内推薦候補に選ばれ、その後訂正が加わり2017年「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」として正式な推薦書がユネスコに提出された。それは12の構成資産からなり、キリスト教禁教期の長崎、天草地方の潜伏キリシタンによる独特な文化的伝統を焦点にあてたものである。<sup>46</sup>

#### 「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産

- ・原城跡
- ・平戸の聖地と集落（春日集落と安満丘）
- ・平戸の聖地と集落（中江ノ島）
- ・天草の崎津集落
- ・外海の出津集落
- ・外海の大野集落
- ・黒島の集落
- ・野崎島の集落跡
- ・頭ヶ島の集落
- ・久賀島の集落
- ・奈留島の江上集落（江上天主堂とその周辺）
- ・大浦天主堂<sup>47</sup>

これら12の構成資産の中で、第一に紹介されているものが原城跡である。禁教初期に起こった島原の乱の舞台、原城跡はキリシタンたちが江戸幕府に大きな衝撃を与えた最も大きな出来事を物語る場所であるためだろう。世界遺産登録に向けて長崎や島原（特に原城跡がある南島原市）はホームページでも宣伝を進めており、今回のユネスコによる世界遺産登録が決定すれば今まで以上に世界から禁教時代のキリシタ

ンへの注目が集まり、その時代を物語る雲仙や島原は聖地や巡礼地としてクローズアップされていくことは確かである。

以上のように、様々な要因によって20世紀以降雲仙岳を中心とする島原半島は19世紀、リゾート地として発展した背景を基盤に、現在殉教地、巡礼地としても認知されるようになっている。明治以降、雲仙・島原は避暑地やリゾート地として名を広げていたため、殉教地としての認識は薄かった。それが近年、避暑地やリゾート地に加え、殉教地としての雲仙・島原がアピールされ、日本、そして世界から注目が集まっている。

## 結 び

本研究は島原半島ジオパーク協議会の助成金援助ならびに佐賀大学地域デザイン研究科の女性・若手教員等の研究支援事業により、雲仙岳を中心とする島原半島の歴史、信仰文化について掘り下げたものである。湯けむりの立つ温泉「地獄」を代表とする豊かな自然によって発展した修験道を出発点にキリシタン迫害の地としての雲仙、リゾート地、そして現代まで続く観光地としての雲仙・島原の経緯を辿った。雲仙・島原は時代の中で様々に姿を変えてきた、ドラマチックな場所である。そして今、雲仙・島原は明治期以降の避暑地・リゾート地として名を挙げたのを基盤に殉教地として新たに注目を浴びつつある。

今回の雲仙・島原をフィールドとする信仰文化の研究、そして長崎市や平戸、天草での現地調査は地域デザイン研究科に所属する者として印象に残るものであった。本論文では、雲仙・島原が様々に姿を変えてきた歴史の移り変わりについて述べたが、その変容の背後には常に人々の葛藤や摩擦がある。この葛藤や摩擦は現代でも地域活性化や観光化を目指す流れの中に様々なレベルで存在している。例えば雲仙・島原が殉教地として認知度が高まっていく中でも注意すべきことがある。潜伏キリシタンやカクレキリシタンの歴史文化は世界的にみて大変特異な例であり、人類の記録として世界に共有していく必要がある。しかし雲仙地獄や原城跡は禁教時代のキリシタンたちの歴史を生々しく語る記憶の場であり、長崎のある地域には少数とは言え現在もカクレキリシタンとして信仰を守る人々がいることを忘れてはいけない。彼らにとってそのような場は複雑な歴史の場である。また今回、ユネスコの世界遺産登録の構成資産に含まれている地域は現在も日々教会に通い、生活している人々がいる場所である。これらの点で完全に途切れていない記憶の場を扱うには、配慮が必要となってくる。1966年の小説『沈黙』が出版されたとき、長崎では禁書に等しかった。それが一転し、近年の映画『沈黙-サイレンス-』は長崎で大きく取り上げられた。そして今日、映画に関連する場所や信仰形態は、地域活性化を促す地域のアイデンティティや観光の材料としてみなされつつある。しかし未だかつての信仰形態を守り続ける人や地域活性化・観光としてのクローズアップを好まない人々の存在を考慮しなければいけない。禁教解除から、いくらか時は流れたとは言え、未だカトリック教会とカクレキリシタンのひずみは存在している。またカクレキリシタン内でも今後の継承や公開について意見が対立しているところもある。現在少数であるとは言え、禁教時代の潜伏キリシタン、カクレキリシタンに関する複雑な想いを抱えている人々がいる中で、地域活性化や観光の名のもとに殉教地としてクローズアップしていくには人々への配慮に加え、再度それらを世に広め、継承していく意味を考える必要があるだろう。このことは、現在日本各地において声高々に謳われる地域創生、地域活性化、観光化を進め、語る上で決して忘れられたり蔑ろにされたりしてはならない事柄である。本研究は地域デザイン研究科に所属する者として、地域創生や地域活性化の意味について再度考え直す標となったと感じている。

佐賀大学大学院女性・若手研究者自主研究グループ「雲仙・島原研究企画」平成29年度研究体制  
 信仰文化研究班 (日欧・比較文化) 雲仙・島原 (東加代子、田中佑実)  
 交易文化研究班 (日欧亜・対外関係) 口之津 (Ta Thi Huyen)  
 観光文化研究班 (日本近代・リゾート・災害復興) 小浜・雲仙 (清川千穂)  
 資料集約調整 (平成29年12月より 津田まりも)

#### 研究協力

島原半島ジオパーク協議会  
 口之津歴史民俗資料館 森 輝隆氏  
 長崎県文化財保護指導委員 原田建夫氏  
 長崎県観光ガイド連絡協議会 田浦元氏  
 佐賀大学芸術地域デザイン学部

ほか、すべての方のお名前を挙げるができませんが関係者の皆様に心より謝意を表します。引き続きのご協力・ご支援をお願い申し上げます。

#### 研究助成

佐賀大学芸術地域デザイン学部平成29年度女性・若手研究者助成  
 島原半島ジオパーク学術研究奨励事業平成29年度研究助成

#### 注

- <sup>1</sup> 佐賀と島原との関わりでは戦国慶長年間以来の島原・国見神代地域と佐賀藩との関わり、天草・島原一揆、原城攻防をめぐる鍋島氏の戦い、明治初期における樽井藤吉の東洋社会党結党と島原、佐賀の関わりなど、九州地域の特色ある歴史の一コマとして挙げるができる。なお樽井藤吉と明治社会主義、アジア主義をめぐるには田中惣五郎、初瀬龍平、飯田鼎、中島岳志らの多くの論考がある。特に樽井の佐賀・九州との関わりについては稿を改めて整理したい。
- <sup>2</sup> 東 美晴「観光空間の生産 — モダンツーリズムと地獄—」『流通経済大学社会学部論叢』第24巻 第1号 2013年。荒木道子「雲仙岳の温泉信仰—満明寺と温泉神社四面宮雲仙岳の温泉信仰： 満明寺と温泉神社四面宮」『観光学論集』第12巻 2017年。
- <sup>3</sup> たとえば中島楽章「16世紀末の九州—東南アジア貿易— 加藤清正のルソン貿易をめぐる—」『史学雑誌』第118編 第8号 2009年。村井章介『世界史のなかの戦国日本』ちくま学芸文庫 2012年。越村勲編『16・17世紀の海商・海賊—アドリア海のウスコクと東シナ海の倭寇—』彩流社 2016年。島原市北有馬町の日之江有馬晴信居城跡・原城跡近くの有馬キリシタン遺産記念館には多くの関連史資料がある。原田建夫氏には、本企画実施にあたり口之津、原城関連郷土史現地調査及び報告会で貴重なご助言をいただいている。改めて謝意を表したい。
- <sup>4</sup> 福岡県三池郡教育会編『三池郡誌』1926年 (復刻版 名著出版 1973年)、6頁。
- <sup>5</sup> 南島原市企画振興課「わがまちのお宝 南島原市 口之津開港450年 ドラマチックな歴史を持つ町 口之津」『ながさき経済』第273号 2012年。からゆきさんの歴史については清水元『アジア海人の思想と行動』NTT出版 1997年。近代口之津とからゆきさんなどをめぐる郷土史跡関連成果として『口之津史跡巡り』(原田建夫、植木こずえ、徳永三恵、中尾輝昭、2018年)がある。
- <sup>6</sup> 岡山俊直、中村泰尚「雲仙温泉における明治期の古写真に関する考察とその活用」『温泉地域研究』第28号 2017年。岡山俊直「英文資料を活用した雲仙温泉における「避暑地時代」の成立過程に関する考察」『温泉地域研究』第26号 2016年。
- <sup>7</sup> 岡林隆敏編著『上海航路の時代—大正・昭和初期の長崎と上海— 長崎文献社 2006年。西川亮、中島直人、窪田亜矢、西村幸夫「昭和前期の雲仙における国際公園都市計画に関する研究— 戦前の景勝地における都市計画の展開」『都市計画論文集』第51巻第3号 2016年。特に砂本文彦『近代日本の国際リゾート— 一九三〇年代の国際観光ホテルを中心に』青弓社 2008年。
- <sup>8</sup> 鈴木正崇『山岳信仰』中公新書 2015年、9頁。

- <sup>9</sup> 同上書、4頁。
- <sup>10</sup> 島原半島ジオパーク協議会 『島原半島ユネスコ世界ジオパークのことがわかる本』 2017年、88頁。
- <sup>11</sup> 荒木道子 「雲仙岳の温泉信仰—満明寺と温泉神社四面宮—」 『観光学論集』 第12巻 2017年、57頁。
- <sup>12</sup> 島原半島ジオパーク協議会、前掲書、88頁。
- <sup>13</sup> 「七日廻りの石」ある日、温泉山の僧坊に子供を預けた女性がわが子に逢いたい一念から女人禁制を破り、一の鳥居を超え、石のところまで来て小川で足を洗い、休んでいたところ、連れてきていた幼児が突然いなくなり、母親は狂ったように七日七夜この石の廻り、幼児を捜し続け、息絶えたという伝承が残っている。島原半島ジオパーク協議会 前掲書、94頁。
- <sup>14</sup> 鈴木 前掲書、13頁。
- <sup>15</sup> 同上書、27頁。
- <sup>16</sup> 同上。
- <sup>17</sup> 荒木 前掲書、58頁。
- <sup>18</sup> 同上書、59頁。
- <sup>19</sup> 同上。
- <sup>20</sup> 同上書、59頁。
- <sup>21</sup> 鈴木 前掲書、23頁。
- <sup>22</sup> 同上。
- <sup>23</sup> 増田義郎 「大航海時代の構図」 『国際関係紀要』 第7巻 第2号 1998年。
- <sup>24</sup> 三宅亨 「倭寇と王直」 『桃山学院大学総合研究所紀要』 第37巻 第3号 2012年。
- <sup>25</sup> 丹野勲 「日本のアジア交易の歴史序説 -古代・中世・近世・幕末・明治初期まで-」 『神奈川大学論集』 第48巻 2014年、4頁。
- <sup>26</sup> ザビエルはスペイン人であったが、日本への布教はポルトガル国王の布教保護権のもとで始められた。スペインは35年遅れの1584年に初めて平戸に来航した。
- <sup>27</sup> 多摩大学インターゼミアジアダイナミズム班 「長崎が拓いたアジアとヨーロッパの交流」 2017年、12頁。
- <sup>28</sup> 1614年大禁教令が出された当時のキリシタンの総数を約37万人として、その頃の総人口が約1千万人であったとの推定から算出。五野井隆史 『日本キリスト教史』 吉川弘文館 1990年、112頁。
- <sup>29</sup> モンタヌス (Arnoldus Montanus 1625-1638年) は、オランダの宣教師、歴史学者。イエズス会の報告書やオランダ使節がもたらした見聞録をもとに、織豊時代から徳川時代の初期に至およそ1世紀の日本の歴史を西洋人の目からまとめた。1669年発刊の「東インド会社遣日使節紀行」(英語訳「日本誌」)は瞬間にオランダ語から英語、フランス語に訳され、出版当時広く伝播した。しかしモンタヌス自身は一度も来日していない。
- <sup>30</sup> モンタヌス著、和田万吉訳 『日本誌』 丙午出版社 1925年、266-275頁。
- <sup>31</sup> 著者は長らくトマス・ア・ケンピスとされていたがヘーラルト・ホロート (1340-1384) であるとする説が通説である。原著にこれといった題名はなく、邦訳として「キリストにならいて」「基督のまねび」「霊操録」などがあてられた。由木康 『キリストにならいて』 教文館 2002年、255-258頁。
- <sup>32</sup> ルイス・デ・グラナダは宗教改革の最中、とりわけ南欧で活躍したキリスト教的修徳思想の中心人物である。イエズス会がこのドミニコ会士の著作を少なからず翻訳した理由として、訳者ラモンがスペイン人であったことに加え、1557年にルイスがポルトガルの管区長になったというイエズス会との深い関係が指摘できる。しかしそれ以上に日本イエズス会がルイスの一連の著述の内包する信仰世界を評価したからだろう。「キリストに倣いて」を愛読していたルイスの著書には、等身大のキリストと個人的に出会うという当時の新思潮が集約されている。H・チースリク監修、太田淑子編 『日本史小百科 キリシタン』 東京堂出版 1999年、132頁。
- <sup>33</sup> 佐藤吉昭 『キリスト教における殉教研究』 創文社 2004年、38頁。
- <sup>34</sup> F. マルナス著、久野桂一郎訳 『日本キリスト教復活史』 みすず書房 1985年、231頁。
- <sup>35</sup> 1860年に那覇に到着したパリ外国宣教会宣教師プティジャンは、先輩にあたるフューレの後を追って1863年長崎に移った。シュルプリース会の司祭に宛てた手紙で、「宣教師にとって全ての思い出の種である長崎に招かれたことを神に感謝します。」と記し、長崎への情熱をにじませている。
- <sup>36</sup> このとき話しかけた女性杉本ゆりは、信仰を告白した後「サンタ・マリアの御像はどこか」と問うた。プティジャンがマリア像を案内すると、信徒らは興奮して祈りを捧げた。互いに同じ宗門であると確認出来たのは、彼らが「悲しみの節」と呼び習わしていたイースター前の四旬節を正しく把握していたことであった。また信徒は「7代耐え忍んだ後にはパードレ様がローマから船でいらっしゃる」という言葉を伝承しており、まさにプティジャンとの出会いを果たした杉本ゆりははじめとする潜伏キリシタンたちが7代目にあたったとされる。

- <sup>37</sup> マルナス 前掲書、234頁。
- <sup>38</sup> 長崎県 『旅する長崎学キリシタン文化 Ⅲ』 長崎文献社 2006年、26頁。
- <sup>39</sup> 雲仙お山の情報館の展示キャプションによる。
- <sup>40</sup> 南満洲鉄道株式会社大連管理局営業課編 『満洲支那交通便覧』 1919年。  
中山龍次 『戦争と電気通信』 社団法人電気通信協会 1942年。  
有山輝雄 『情報覇権と帝国日本』 第1巻、吉川弘文館 2013年、30-32頁。
- <sup>41</sup> 同上。
- <sup>42</sup> 実際に宣教師や信者が受難した地獄はこの場所ではなく、現在は封鎖されている小地獄だとされている。
- <sup>43</sup> 徳富蘇峰 (1863-1957) 日本のジャーナリスト、思想家、歴史家、評論家。
- <sup>44</sup> 雲仙温泉観光協会ホームページより
- <sup>45</sup> 『沈黙』 遠藤周作 転び者の声なき声を 『西日本新聞』 2016年8月9日。
- <sup>46</sup> 長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産ホームページの掲載による。
- <sup>47</sup> 長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産ホームページの掲載による。